

2023（令和 5）年 11 月 24 日

ハイトピア伊賀 5 階多目的大研修室

令和 5 年度 第 3 回 伊賀市美術博物館建設準備委員会

伊賀市美術博物館 基本構想（素案）

伊賀市美術博物館建設準備委員会

年 月 日

はじめに

伊賀市は、古代・中世においては当時の都である奈良や京都に近く、都の文化の影響を色濃く受けた文物がもたらされ、その地理的・歴史的背景から大和・京文化の影響を強く受けながらも独自の文化を醸成してきた。近世以降は、松尾芭蕉が青年期まで過ごし、折に触れ里帰りをし、創作活動をおこなった上野城下町を中心として、都市文化が花開き、近代以降は芸術の町として全国に誇る芸術家を輩出するなど、豊かな歴史的資源を有し、多彩な分野で優れた文化的人材を多く輩出している。

こうした歴史的背景のもと、伊賀市には、俳諧、古文書等、考古、民俗、美術工芸の各種資料が多数所蔵されている。これらの中には国や県、市の文化財に指定されている重要な資料もある。また、美術や工芸の作家には、全国的にも著名な作家のものが含まれる。

これら、俳諧や歴史、文化に関する資料、美術工芸作品は、伊賀市の文化や歴史の理解に欠くことのできない、かけがえのない貴重な遺産である。これらは、市民共有の財産であり、伊賀市の人や地域づくりの礎となるものとなるものである。

美術博物館は、これらの「伊賀市民の宝物」を、適正に保存・管理、調査、研究、公開・活用してその価値を高めながら、次の世代に引き継いでいくための施設である。身近なところで、文化芸術に触れ創造することができる場を作り出し、市民文化の向上をめざすとともに、未来を担う子どもたちの豊かな感性を育て、伊賀と伊賀で生み出された文化を大切にすることを育むための拠点となる。また、伊賀市を訪れる人々に伊賀の魅力を広く発信するとともに、賑わいの創出につながる活動を行う。

ここに、伊賀市の美術博物館の建設に関する、めざす姿、方向性などを明確にすることを目的として基本構想としてまとめるものである。

第1章 美術博物館基本構想の背景

伊賀市の「これまで」

芭蕉翁記念館の建設

俳聖松尾芭蕉（以下、「芭蕉翁」という。）の生誕地として、昭和初期から芭蕉翁顕彰の施設の建設を進めてきた。芭蕉翁 250 年忌を契機に俳聖殿と芭蕉文庫の建設があわせて検討されたが、実現には至らなかった。芭蕉翁を顕彰し、その偉業を後世に伝えようとする篤志者らにより蒐集され、旧上野市に寄贈された芭蕉翁の筆跡や関連資料を核として、1951（昭和 26）年旧上野市立図書館内に芭蕉文庫が設置された。その後、図書館とは別の施設として「芭蕉文庫」の建設が希望され、1955（昭和 30）年 8 月に「芭蕉会館」の建設計画が完成し、自身も俳人であった（株）間組社長、神部満之助氏から文庫建設にかかる篤志寄付の申し出により、1959（昭和 34）年 6 月に竣工し、同年 10 月 10 日「芭蕉翁記念館」として開館した。

新芭蕉翁記念館の建設に係る検討

1994（平成 6）年 10 月、芭蕉翁記念館は、施設の老朽化、収集保存及び展示機能などの諸問題が表面化してきたため、「芭蕉翁生誕 350 年記念事業」の一環として、旧上野市で新館建設を検討する「芭蕉翁記念館建設検討委員会」が設置され、1998（平成 10）年 1 月、「芭蕉翁記念館建設にかかわる答申」が検討委員会から提出された。この答申を受け、庁内で協議を進めたが、具体的な時期や場所などの結論には至らなかった。

市町村合併後の 2007（平成 19）年 11 月、（仮称）新芭蕉翁記念館整備検討委員会が設置され、2008（平成 20）年 4 月、基本構想が市に答申され、「（仮称）新芭蕉翁記念館基本構想」を策定した。この基本構想を受け、同年 7 月、（仮称）芭蕉翁記念館基本計画検討委員会が設置され、2009（平成 21）年 3 月、基本計画が市に答申され、「（仮称）新芭蕉翁記念館基本計画」を策定した。しかし、各関係機関との調整が難航したことから、計画の内容を再考することとなった。2013（平成 25）年 2 月、（仮称）芭蕉翁記念館事業計画検討委員会が設置され、計画を再考した結果、建設候補地として「市役所北庁舎跡」「桃青中学校跡」「上野図書館」の 3 箇所が示された。しかし、同時期に市庁舎移転や旧上野市庁舎・上野図書館の整備計画が議論されていたことから、それらの検討結果を待つこととなった。

芭蕉翁は、1644 年に現在の三重県伊賀市で生まれた。

2004（平成 16）年 11 月 1 日上野市・伊賀町・島ヶ原村・阿山町・大山田村・青山町の 6 市町村が合併し「伊賀市」が誕生した。



芭蕉翁記念館

【芭蕉翁顕彰会】

旧上野市、旧伊賀町それぞれの芭蕉翁顕彰会により様々な活動が行われてきた。2004（平成 16）年の市町村合併に伴い、2007（平成 19）年 4 月 1 日に両顕彰会が統合され、新たな（財）芭蕉翁顕彰会として市内全域で顕彰活動を行っている。

伊賀市の「これまで」

資料館の統廃合

伊賀市合併前、多くの旧市町村には歴史・考古・民俗の資料を展示する資料館が設置されていた。

合併後、類似施設を統廃合する方針のもと、2011（平成 23）年 3 月末に島ヶ原資料館と阿山ふるさと資料館を廃止し、2015（平成 27）年に策定された「公共施設最適化計画」を受けて、2017（平成 29）年 2 月末に上野歴史民俗資料館を廃止した。さらに、施設の耐震性能の不足により 2020（令和 2）年 3 月末に柘植歴史資料館を廃止した。

その結果、伊賀市内において考古・歴史・民俗の資料を観覧することができるのは、大山田郷土資料館のみとなっている。

文化財の保存・活用と博物館などの施設の整備

県内最多の指定文化財数を誇る伊賀市では、歴史文化の特徴を地域の資産として保存・継承するとともに活用し、地域総がかりで魅力ある地域づくり、まちづくりの実現に寄与するため、2023（令和 5）年 7 月に「伊賀市文化財保存活用地域計画」を策定した。ここでは、文化財を保存・活用するための 4 つの取り組みとして、調査研究・保存管理・普及啓発・活用を掲げ、歴史や文化財を楽しむ機会の充実に努めるための取り組みとして、博物館などの整備の検討を掲げている。

美術館建設に係る動き

2006（平成 18）年 2 月、「美術館建設を推進する会」が市へ、約 9,200 人の市民の署名を添えて、旧上野市街中心部で文化関連施設近くに美術館の建設を求める陳情書を提出された。同年 6 月には、市議会に美術館建設を求める請願が提出され、採択された。また、2014（平成 26）年 1 月には、「美術館建設を求める会」が市へ、旧上野市庁舎に美術施設だけでなく、芭蕉翁記念館や歴史的博物館などを複合した施設の建設を求める要望書が提出された。

美術博物館の必要性

課題

伊賀市が所蔵する資料を取り巻く環境には、大きな課題がある。

俳諧関係資料を所蔵する芭蕉翁記念館は、1959（昭和 34）年に建設されてから 60 年以上が経過し、施設の老朽化により資料の適切な保管・展示に支障をきたしている。古文書等の歴史資料については、資料の劣化を防ぐよう努めているが、既存施設を利用しているため、望ましい保管状況とは言えない。また、考古や民俗資料についても、資料の適切な管理や価値を周知するための展示の機会がほとんどないのが現状である。美術工芸作品においては、適切に保管し、展示できる施設がないことから、伊賀が育んだ芸術家の作品でありながら収集できず、市内で鑑賞することができないといった課題がある。

さらに、これら各種資料の適切な保存管理と、調査研究、活用・発信するための学芸員などの専門職員の配置ができていないことも課題となっている。

美術博物館の必要性

【文化的・歴史的な価値の保護】

伊賀市の長い歴史の中で大切に受け継がれてきた芭蕉翁と歴史・文化に関連する資料や美術工芸作品は、かけがえのない貴重な遺産である。これらは、市民共有の財産であり、伊賀市の人や地域づくりの礎となる。伊賀の歴史・文化・芸術を知り、そこで生まれた文化に触れることにより、伊賀への深い理解と愛着、市民としての誇りや一体感を得ることができる。

しかし、この市民共有の財産を適切に保管できる施設がなく、適切な環境で展示・公開ができる施設もないのが伊賀市の現状である。ひとたび失われれば二度と取り戻すことのできない大切な財産を守り、将来にわたって引き継いでいくことは、私たちの責務である。

【持続的で発展的な地域づくり】

近年、文化芸術が生み出す多様な価値を活かした地域づくりが求められている。文化芸術基本法では、「地域が抱える様々な課題を克服し、持続的・発展的に成長していくために、社会を支える基盤として文化芸術を位置づけ、単なる振興にとどまらず積極的に活用していくこと。社会を支えている人々の行動、その源である精神活動は、文化芸術に触れ

美術博物館の必要性

ることにより豊かになり、地域を持続的・発展的に成長させる原動力となる。」と示されている。美術博物館は、身近な場所で、文化を鑑賞し創造することができる機会を創出することにより、心豊かなまちづくりを具現化する拠点となる。

【伊賀市の未来のため】

美術博物館は、未来を担う子どもたちの教育の場となり、幅広い層の学びの場となる。創造性や自主性を育むとともに、ヒトとヒトのつながり、生きる絆を生み出す。

伊賀市固有の歴史・文化・芸術を守り、ヒトとヒト、ヒトとマチ、ヒトと文化がつながり、新しい文化を創造し、発信する、未来とつながる新たな文化創造の拠点となる美術博物館を整備することは、伊賀市の未来を守ることである。

基本構想の位置づけ

基本構想は、（仮称）新芭蕉翁記念館基本構想を踏まえ、「第2次伊賀市総合計画第3次基本計画」、「伊賀市教育大綱」をはじめ、「伊賀市文化振興条例」「伊賀市文化振興ビジョン」「伊賀市文化振興プラン」「伊賀市文化財保存活用地域計画」といった伊賀市の文化行政に係る計画などとの整合・適応を図りながら策定する。

施策 6-3 文化・芸術

市民誰もが暮らしの中で文化・芸術に触れることにより豊かな感性と創造力を育むことができるよう、機会の提供と充実に努める。

文化振興プランに沿って文化・芸術振興の具体的な取り組みを進めることで市民の文化・芸術意識の向上を図る。多くの人に親しまれる顕彰事業や芭蕉翁記念館の運営を行うことと、人づくり・まちづくりにつながる新芭蕉翁記念館の整備に向けた検討を進める。

施策 6-4 歴史・文化遺産

貴重な歴史資料や文化財を調査・保存・管理し、それらに関する情報を発信・提供するとともに活用に努める。
・身近な歴史や文化財の成り立ちや価値を伝えるため展示施設の整備に努める

前文

文化薫る伊賀市の風土は、先人のたゆまぬ努力によって今日まで大切に受け継がれてきました。文化芸術の担い手は私たち市民であり、一人ひとりが文化芸術の主演としてその歴史を大切にしながら次世代へと引き継ぎ、将来にわたり持続可能な文化都市を形成していくことが必要です。

基本方針

誰もが文化芸術に触れ合える機会の創出
施設の整備と有効活用による文化芸術環境の整備

施設の整備 ・有効活用による文化芸術環境づくりを進める。

発掘や寄贈等によって収集された埋蔵文化財や美術品等を集中的に管理するための施設の確保も必要となる。これらの保管品を資料化し、ホームページや冊子、特別展示などで公開することで、文化遺産として次代に引き継ぐ。

指定文化財などの貴重な資料・史料の公開

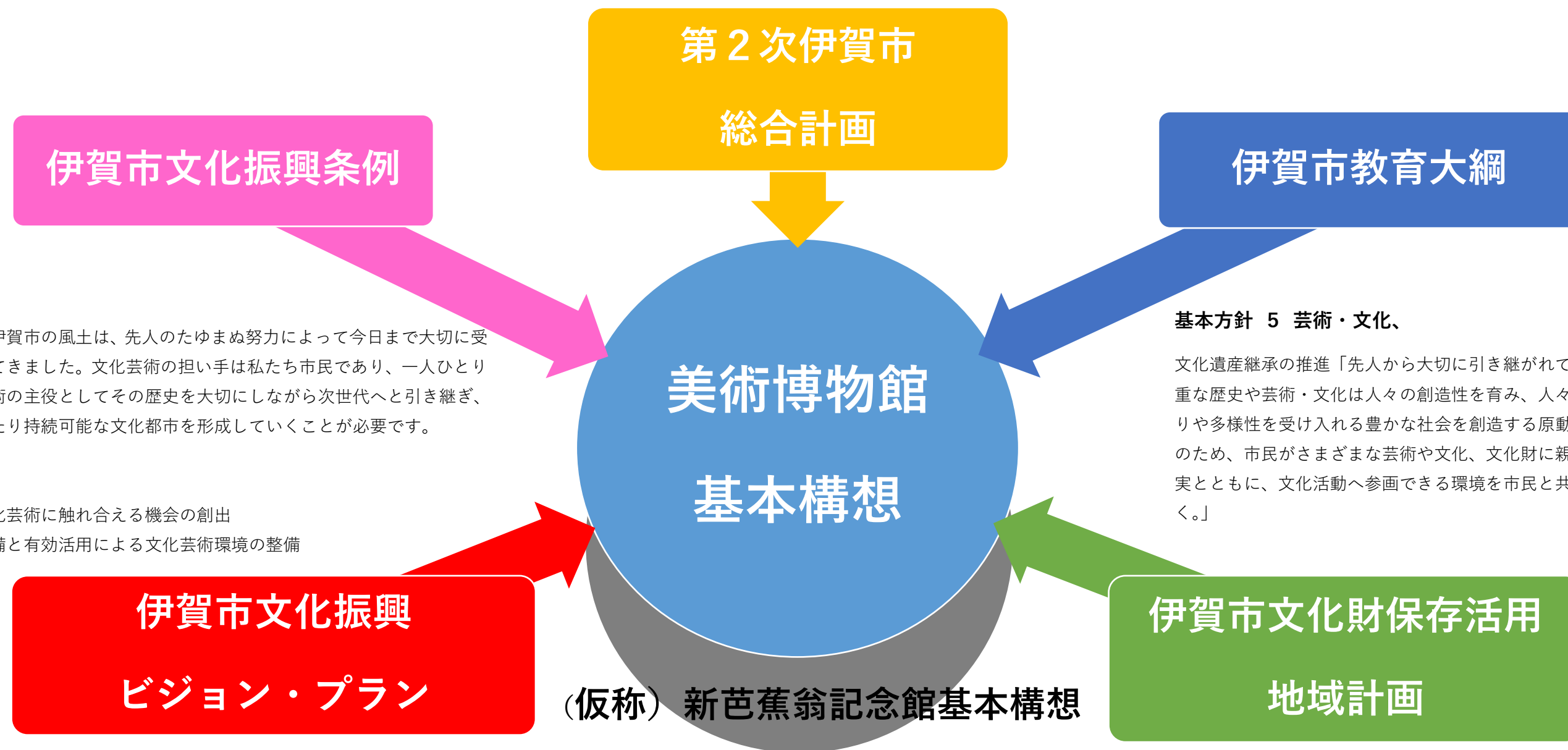
公的に収集（寄贈含む）した芸術作品などの保管場所の確保

収集品の資料化と公開展示

基本方針 5 芸術・文化、

文化遺産継承の推進「先人から大切に引き継がれてきた地域の貴重な歴史や芸術・文化は人々の創造性を育み、人々の心のつながりや多様性を受け入れる豊かな社会を創造する原動力となる。このため、市民がさまざまな芸術や文化、文化財に親しむ機会の充実とともに、文化活動へ参画できる環境を市民と共に整備していく。」

2023年（令和5）7月に「伊賀市文化財保存活用地域計画」を策定。文化財を保存・活用するための4つの取り組み、調査研究・保存管理・普及啓発・活用を定め、歴史や文化財を楽しむ機会を充実させるための取り組みとして、博物館等の施設の整備の検討を掲げている。



第2章 基本理念・めざす姿と方向性

美術博物館の基本理念・めざす姿

基本理念

① つながる未来 伊賀の文化を誇る拠点

◆魅力再発見

伊賀市の魅力を再発見し、地域の誇りを共有することで、地域社会の一体感を高め、地域への愛着を深める拠点をめざす。

◆伊賀市の誇る豊かな過去

伊賀市の誇る豊かな歴史や文化を基盤として、芭蕉翁の精神、伊賀市の歴史と文化、そして芸術を守り、発展させ、未来へ引き継ぐことをめざす。

◆つながる過去・現在・未来

美術博物館は、過去から現在を結び、未来への起点となる施設をめざす。

② つながるヒトヒト 共に育つ創造の拠点

◆地域の魅力引き出す

文化と芸術を活かし、地域の魅力を引き出すことで、市民や次代を担う子どもたちと共に成長する創造の拠点をめざす。

◆ヒトとヒトのつながり

美術博物館を通して、人々がつながり、市民や次代を担う子どもたちと共に、未来の文化を創造することで、人々が豊かな心を育む場となることをめざす。

◆持続的で発展的なマチづくり

美術博物館を通して、ヒトと多様な主体とがつながり、持続的かつ発展的に成長できるマチづくりに貢献することをめざす。

③ つながる世界 伊賀の魅力発信の拠点

◆市民文化の向上

伊賀の魅力を伝え地域の誇りを育み未来に継承することで市民文化の向上をめざす。

◆伊賀の文化を世界に発信

「伊賀の文化」つまりは「伊賀の魅力」を日本全国だけでなく、世界に発信する拠点をめざす。

◆賑わいの拠点

誘客活動を積極的に行い賑わいの創出をめざす。

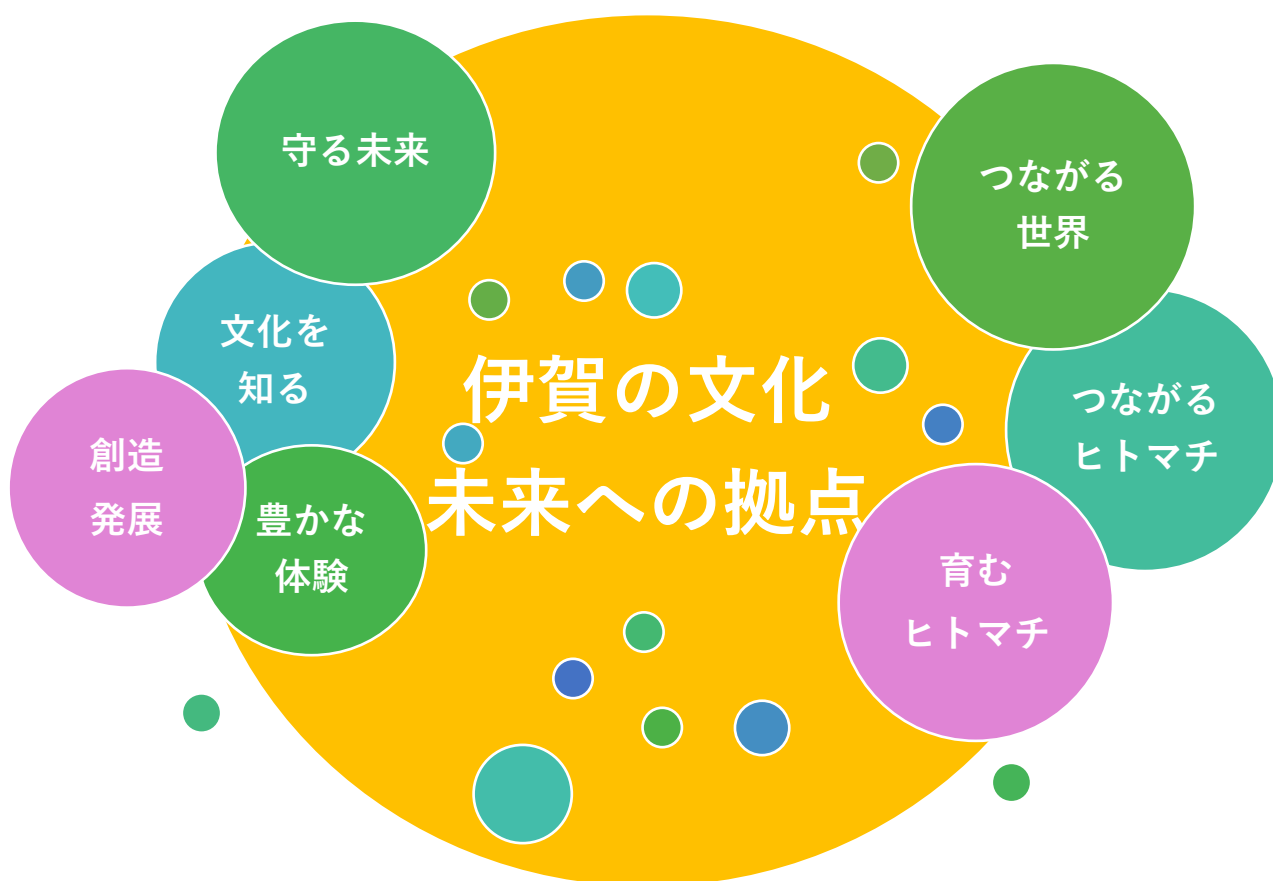
美術博物館の基本理念・めざす姿

芭蕉翁のふるさと 伊賀の文化 ひろがる未来への拠点

芭蕉翁ゆかりの場所は各地に点在しているが、芭蕉翁のふるさとは、「伊賀市」に他ならない。

この世界的な偉人を輩出した伊賀市は、芭蕉翁の俳文学・伊賀焼・伊賀流忍者・能・伝統行事・美術工芸作品など、固有の文化を育んできた。これら溢れる文化はまさに「伊賀の文化」を象徴している。

美術博物館は、この「伊賀の文化」を守り、知る拠点として、持続可能なまちづくりに貢献し、人々が豊かな心を育む場、そして、創造性と多様性に富んだ未来につながる場をめざす。



美術博物館の方向性

誇りと愛着

美術博物館のめざす姿を実現するためには、芭蕉翁や伊賀市の歴史・文化・芸術に関する資料をわかりやすく紹介することや、様々な連携協働を促し、伊賀市の魅力を発信する役割を担うことが求められる。また、芭蕉翁に関する研究と俳文学研究において、全国の中心的存在となること、伊賀の歴史・文化・芸術の拠点としての専門的、学術的な収集・保管・研究を担うことが求められる。

そこで、美術博物館のめざす姿を実現するための5つの方向性を掲げる。

地域への愛着・誇りを高める

芭蕉翁は地域の郷土愛と心の豊かさを育む象徴である。芭蕉翁の業績を讃え、後世に継承することは、伊賀市にとって極めて重要な使命である。

芭蕉翁をはじめ、伊賀市の歴史・文化・芸術を通して、地域の魅力を再発見し、地域の誇りを共有することで、地域の一体感を高め、地域への愛着を深める。

共に育つ

新たな文化の創造、次代を担う才能を育てる

多彩な文化体験を提供することで、ヒトの成長に寄与し、地域の魅力を引き出し、伊賀市の文化芸術が発展し、ヒトマチを共に育てる。

市民が文化を創り、育て、楽しむ、身近に感じてもらう場を提供するとともに、次代の才能を育てるプラットフォームの役割を担い、表現力や感性を育み、地域の文化に新たな次代を育てる。

実物の歴史・文化・芸術に触れることができる体験性や柔軟性を兼ね備え、創造的に斬新なアイデアを盛り込んだ展示などを提供し、市民の好奇心を喚起させ、創造力や共感力を養う場を提供する。

【プラットフォーム】：基盤となる

連携・協働

学校・地域・文化団体などとの連携・協働

地域や文化団体などとの連携を通して、新たな文化を創造し、地域の歴史・文化・芸術を親しむ場として、訪れる人々にとって特別な場をめざす。

学校との連携を強化し、教育プログラムを充実させ、子供たちや学生に芭蕉翁や歴史・文化・芸術についての学習機会を提供する。

多様な主体と連携・協働し、ワークショップや体験プログラムなどを提供する中核を担い、地域の共感性を高めることに寄与する施設をめざす。

美術博物館の方向性

調査・研究

俳文学の拠点・伊賀の歴史文化の拠点

芭蕉翁に関する研究と俳文学研究において、全国の中心的存在となる施設の構築をめざす。

伊賀の歴史・文化・芸術の中心的存在として、地域の特徴を示す拠点をめざす。

資料については、長期的な収集方針を立て、芭蕉翁ならびに俳諧俳句関連施設の中心的な施設として、また、伊賀の歴史・文化・芸術の地域の特徴を示す拠点として、専門的・学術的な調査研究を行うとともに、適正な環境と体制のもと保管し継承する。

発信

情報発信の拠点

市民が、地域の誇りを育み、新たな文化を創造し、伊賀の歴史・文化・芸術の魅力を伝え、未来に継承することの役割を果たし、市民文化の向上をめざす。

芭蕉のふるさと「伊賀の文化」を誇り、芭蕉翁に関する情報、伊賀の歴史・文化・芸術の魅力を広く発信する拠点をめざす。

伊賀市を訪れる来訪者の増加を促すため、賑わいの創出につながる活動を行う。

第3章 美術博物館の管理運営について

美術博物館の基本的な機能活動を満たすためには、効率的・効果的な管理運営を行うことが必要であるとともに、芭蕉翁・博物・美術それぞれの施設の特性に合った運営や活動も重要となる。

運営組織

- ・市民のニーズに応えるとともに、美術博物館の円滑な管理運営ができるよう、館長、学芸員、事務職員など必要な職種と適正な人員、人材の配置を検討する。
- ・高度な専門性をもったサービスを提供できる組織をめざす。

運営形態

継続的な管理運営を可能にするため、中長期的な視点に立ち、市の財政状況を鑑み、効率的な運営形態を検討する。

第4章 美術博物館の立地場所について
